

「動物と新しい医療 ～北原リハビリテーション病院～」

動物園・動物飼育専攻2年

奥田絢菜 大関竜也

<目的>

2019年8月10日、11日に企業様からの依頼で東京都八王子市の北原リハビリテーション病院でふれあい動物園を実施。単純な動物との触れ合いの場の提供だけでなく、入院患者様のリハビリ効果も期待するプログラムを作る。

<方法>

ふれあいを行う前に、今回研究を行う場所である“北原リハビリテーション病院”を訪れ会場の下見と企業様の要望を聞き、今私たちが担当している動物の紹介や出来ることなどを説明し打ち合わせをした。事前課題として脳卒中について、リハビリテーションにはどのようなものがあるか、動物をどのように活かせるのかを考えた。当日は、ケヅメリクガメ、ミニブタ、カピバラ、コモンスザル、ヨウムなど多くの動物を連れて行き、ふれあいを行った。その中でコモンスザルのキバを担当し、適切なふれあい方について考えた。

<結果>

1日目はそれぞれ動物を担当し、ふれあい動物園を実施した。動物の紹介や、患者様との交流を深めた。また、患者様がどのような方なのかなどもふれあいを通じ理解した。終了後に、患者様と動物の適合を考え決定をした。2日目は、コモンスザルのキバと88歳Aさん（男性）の患者様を担当する事になった。Aさんは脳梗塞により右半身に麻痺が残っていた。麻痺のない左手で両手ともボールキャッチを行うことにしたが、キバが慣れない場所ということもあり緊張から集中できず、失敗に終わってしまった。さらに、暑さ対策で渡していた冷たいペットボトルを使い、普段トレーニングしている行動、尚且つ今引き出せる行動として、ペットボトル開けを行った。患者様は麻痺のない左手でペットボトルを持ち開けることが出来、笑顔が見られた。次に看護師からのアドバイスもあり麻痺のある右手に持ち替えて行った。患者様がしっかりと持つことが出来たため開けることが出来た。リハビリ的な結果としては、手をしっかりと伸ばしおさえていたことで上体がきちんと上がり骨盤も起こした状態を維持できた。左手を少しではあるが動かせたこと、キバが開けることが出来たことで「自分が持つことが出来たから成功した。」という気持ちからかとても笑顔になっていた。患者様が喜んで、運動的なリハビリだけでなく精神的なリハビリにつながったという結果が残せた。今回のふれあいは普段とは違い、短時間でのふれあいだった為、動物自身の負担、ストレスも少なかったのではないと思う。また、無理に動物を動かすのではなく状況に合わせ行動を引き出すことが出来、動物にも患者様にも無理のないリハビリが行えたと思う。

<展望>

今までとは違い、動物を介したリハビリテーションが目的だったため難しさはあったが、実施していく中でそれぞれが普段からその動物の飼育やトレーニングを行っているからこそ、動物の行動や魅力を引き出し結果につなげる事が出来たのだと思う。しかし、今回キバとの失敗で終わってしまったボールキャッチは、どんな状況にでも対応できるようにトレーニングやふれあい動物園などでも実施していきたいと思った。そうすることでさらなる要望に応え、今回よりも質の高いリハビリテーションが行えるのではないと思う。来年度以降も継続し担当した患者様の経過を知るなど1度きりの関係ではなく交流を続けていきたい。

